企業組合 県木住

青森県初の女性剪定士

薪ストーブのある平屋

青森県初の女性りんご剪定士――石岡紫織様。2018年3月に資格を取得した。父の跡を継ぎ、りんご生産者として歩み出してから10年目の快挙であった。〝チャレンジの人〟である。パイロットを夢見て、ニュージーランドで自家用操縦士の試験に合格。次の最終目標である業務用操縦士を目指していた矢先に父の訃報に接し、帰郷を余儀なくされた。りんごづくりに励む一方、築100年になる母屋の建替えも長女・石岡様の役目であった。りんご園でいつも聞いているラジオから呼びかけるようにコマーシャルが流れる。子どもたちが声をそろえて、「県・木・住！」。

ユーザー訪問

石岡 紫織 様邸

DATA

弘前市下湯口　2018年12月竣工

■延べ床面積／平屋建て28.24坪（93.35㎡）

■使用青森県産材／ヒバ（土台）、スギ（柱、床、内壁）、アカマツ（梁）など。

航空自衛隊への入隊が石岡紫織様のスタートだ。パイロットを夢見るようになったのは飛行機好きだった父親の影響という。自衛隊で、あと一歩のところで叶わなかった夢を追って、ニュージーランドのパイロット養成学校に入学。決断をすぐ実行に移す行動力がすごい。夢見たパイロットの仕事に就ける業務用操縦士の資格取得まであと一歩のところで……。今――操縦桿（そうじゅうかん）を握るはずだったその手でりんごの葉取りをしながら石岡様は、「やるだけやった後だったから、割り切れたんです」と話す。薬剤散布のスピードスプレーヤーも運転すれば、りんごの古木をチェンソーで伐採もする。求めるものをその手で〝摑む〟生き方。りんご剪定士の資格まで摑んだ。思い立ったら「弾丸なんですよ」と笑う。よし家を建てよう、と雪

葉取りをする石岡紫織様。青森県初の女性りんご剪定士の資格を持つ〝チャレンジの人〟

床と壁の美しいスギの木肌に囲まれたひと続きのリビングとキッチン

道の高速道路を飛ばして向かった先が、県木住であった。

石岡様の話　建てようと踏み切ったのは、東京にいる妹が出産することになったのがきっかけです。母には初孫、わたしには甥っ子になる赤ちゃんを、新しい家で迎えてあげたいですからね。明治の歴史ある家を壊してしまうのはもったいないと周りの皆さんには言われたけど、問題は雪でした。茅葺きにトタンをかぶせた屋根から道路に雪が滑り落ちるんです。盛り上がった雪の山を片付けるのは肉体労働ですよ。冬になるたびに建て替えを考えてはいたんですけどね。祖母が4年前に亡くなり、妹が結婚し、出産することになったことが背中を押してくれたかたちですね。

りんご作りの褒美が薪灯油を燃やす必要ない

——どんな家にしようと思いましたか。

石岡様の話　「薪ストーブ」のある「平屋」です。今のところは母との2人暮らしだから平屋でいいし、薪ストーブはりんご農家に必需品です。剪定枝や古木が薪になるのだから買わなくてもいいわけです。その2つの要望は決まっていたけど、考えているだけでは埒が明きませんので、展示場を見学してみることにしました。4社の展示場が並んで建っているハウジングメッセが、わが家からそう遠くないところにあります。行ってみました。さすがは展示場だけあってどの外観も内観も豪華なものでしたけど、こちらの頭にあるのは「薪ストーブ」と「平屋」なんです。それで、室内を見学した後で、「暖房は薪ストーブにしたいんですけど……」と話すと、たいがいは難色を示して、セントラルヒーティングや床暖房を勧められました。それが今の時代の主流の暖房だとは分かっていましたけど、こっちはりんご農家で、りんごづくりのご褒美みたいに毎年春に

なれば薪がどっさり手に入るのだから、わざわざ電気を使ったり灯油を燃やしたりする必要はないわけです。東日本大震災で停電になったときには薪ストーブのお陰で凌ぐことができたし、炎は明かりにもなりました。薪ストーブのない暮らしなんて考えられません。

玄関の土間に置かれた薪ストーブ。燃料の薪は常時2年分くらいストックされてある

――石岡様が求める暮らしに合った家がなかったということですね。

石岡様の話　見学したうち、1社が図面を作成してくれました。でも、薪ストーブ1台で家全体が暖まるようなプランからはズレていましたね。ストーブが部屋の隅にあって、他の部屋には空調で回すというのだから、要らない電気を使うことになるわけです。薪ストーブを付ける意味がありません。そこで次に、新聞広告で目にした地元の工務店の見学会に行ってみました。施主が農家の方らしいので参考になるかもと思ってね。大きく立派で、内部も圧倒されるほど豪華でしたけど、こっちの要望とはかけ離れていました。

その帰りに、ふと思い出したのが、大鰐のりんご農家の仲間のKさんの一言だったんですよ。「薪ストーブ付けるなら県木住がいいんじゃない」と。〝りんご女子会〟みたいな、仲間たちが集まって開く勉強会のとき

薪ストーブを囲むように壁にも天井にも木がたくさん張られたリビング

に、そう言ったんです。その人もいずれは建てる計画があって、県木住の見学会に行ったこともあるそうなんです。そのさりげない一言が、わたしの耳に残っていたんですね。帰宅してすぐにネットで県木住を検索してみました。ホームページに薪ストーブのある室内の写真がたくさん載っていました。薪ストーブの炎と、室内の「木」を使った感じがイメージにぴったりでした。そうそう、こういう家なんだよ――。その日の夕方に県木住に電話をしました。「これから行きます」って。雪の高速道路を母と一緒に青森へ向かいました。応対してくれたのが佐藤さん(佐藤時彦代表)でした。

佐藤代表の話　事務所に来られたのは2018年の2月24日の夕方でした。1時間半にわたってじっくりお話を聞かせていただきました。2人姉妹の長女で、男手がなかったからりんご農家を継ぐしかなかった、と

薪ストーブ1台で家中の暖房をまかなっている

はいえ、パイロットを目指していた道半ばのことで本音では不本意だったことでしょう。それでもりんごづくりを一から始めて、剪定士の資格まで取って、今度は家を建てようというのですからガッツのある女性だと思いました。参考になればと当社で建てた平屋の図面をお見せしました。考えてみれば、りんごづくりは「薪」というエネルギーが自給できる〝温暖化ストップ〟に貢献する仕事でもあるんですね。当社では、県産材の使用を含め、トータルで二酸化炭素の排出を節減できる家づくりを提案しています。そのことに石岡様は共感してくださいました。翌月の3月に五所川原で2軒、完成見学会を開く予定でしたので、そのときにご案内することにしました。

大窓から陽光が射し込む明るいリビング

石岡様の話　見学したお宅は玄関土間に薪ストーブがあって理想的でしたね。こんなふうに玄関土間にストーブを置けば他の部屋も暖まるんだよ、ってつい呟いていましたよ。それともう1軒は、県木住の大工さん

のご自宅ということで、ここも薪ストーブでした。床も木だし、薪ストーブを囲むように壁にも天井にも木がたくさん張ってあって、見惚れました。こういう「木の家」を建てたかったんです。母も同様に気に入ったようでした。

山の木が安すぎて驚き価格こそ林業を支える

――県産の木材を使うことに関心はありましたか。

石岡様の話　地元の山の木には関心がありました。先祖からの山がありますからね。その山のスギを、ある林業の人が買いたいと言うので売ったんですけど、びっくりしましたね、安くて。これじゃ林業は元気がなくなるわけですよ。励みがないもの。高く売れれば励みになって頑張るんです。就農1年目のことが蘇りましたよ。初めて収穫したりんご1箱の値段が７００円だったんです。たったの７００円。りんご箱込みの値段ですから、箱代の３００円を差し引けば４００円です。唖然としましたね。原因は雹（ひょう）でした。父の葬式の後に急激に天気が変わって雹が降ってきたんです。参列者たちが口々に心配した「雹害」が現実となったのです。値段は生活の支えですし、生産者の喜びです。励みです。自然相手の仕事の厳しさの洗礼を受けたわけだけど、今にして思えば、最低のところからスター

どの部屋の床にも無垢のスギが張られ、室内全体に落ち着いた一体感をもたらせている

石岡様の部屋。コーナーにカウンターを設け、事務室を兼ねている

トしたわけで、あとは底から上がっていくだけと開き直ることができましたね。

佐藤代表の話　（タブレット型端末で検索したデータを示しながら）国産材丸太の価格が一番高かったのが昭和55年あたりですが、現在はピーク時の半分以下になっているんです。期待していた価格で売れない丸太になると、山主は山を大事にしなくなってしまいます。山が元気にならないと環境も良くなりません。今や世界のテーマは「ストップ温暖化」です。少しでも貢献できればと、お客様のご協力を得ながら県産材の家づくりを進めています。

（出掛けていたお母様が帰宅した）

お母様の話　娘の運転する車で県木住を訪ねて、その帰りには、気持ちはほぼ決まっていました。薪ストーブを積極的に付けていることが決め手でした。佐藤さんの応対も丁寧で誠実さが感じられましたしね。ただ、一つ気がかりなことがあったんです。打ち合わせです。県

◀薪ストーブの隣がペットのウサちゃんの居場所

木住に頼めば間取りとかいろいろ細かな打ち合わせをするときに、その都度青森まで行かなければなりません。りんご農家なので作業が終わった夕方以降でないと時間が取れないのです。そこがうまくいくかどうか心配でした。

ところがフタを開けてみたら、なんと佐藤さんのお住まいは弘前というじゃありませんか。こっちから出向かなくても、佐藤さんが間取りを持って打ち合わせに来てくれました。大助かりでした。

お客様の寝室にもなる予備の和室

佐藤代表のコメント

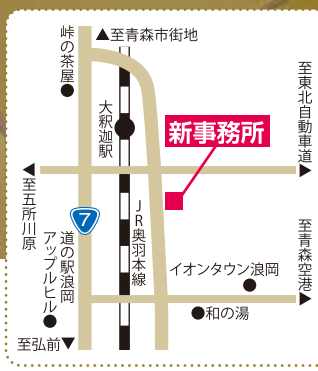
石岡様は昔からずっと薪ストーブの暮らしをされていたそうです。りんごの老齢木を毎年何本も伐ることになるので、燃料はおのずと〝りんご薪〟ということになります。りんご農家では〝エコな暮らし〟を普通に実践していたんですね。暖房エネルギーを自給する省エネ効果は賞賛に値します。自分のマンパワー（運動エネルギー）で暖房エネルギーをつくっているのですから。

薪ストーブの暮らしをされているすべてのりんご農家さんに改めて敬意を表します。

事務所移転のお知らせ

県木住では2020年4月1日に青森市浪岡に事務所を移転します。

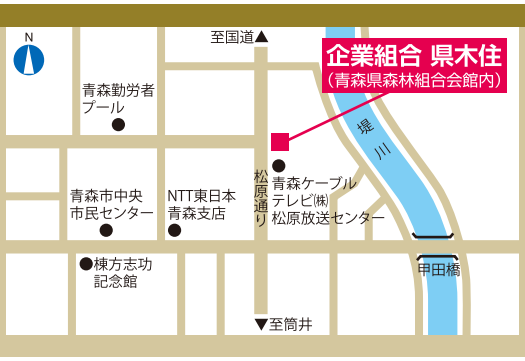
●新事務所住所…青森市浪岡徳才子字福田60の2



青森の木で家をつくる 企業組合 県木住

企業組合 県木住

青森市松原1丁目16-25（青森県森林組合会館内2F・3F）
TEL.017-732-5333 FAX.017-732-5777
http://www.kenmokujyu.com E-mail : info@kenmokujyu.com



有限会社 大坊建設

建築家と工務店の合作

「ご縁に感謝です」――宛名の下に筆字でそう書かれたB4の封筒が届いた。笑顔のイラストは、㈲大坊建設の大坊幸吉社長だ。感謝の〝思い〟が伝わってくる封筒の中身はCDのよう。とすれば、用件は取材依頼かも。予想どおりに、「寶田（たからだ）様邸の完成写真データをお送りします」と一筆が同封されてあった。パソコンの画面に映し出された外観デザインの斬新さ。内観の、天井に登り梁を見せて「木」を空間に融け込ませたセンスも目を惹く。東京の建築家が設計し、大坊建設が建てた「青森県産材の家」。さっそく大坊社長に取材段取りの電話をかけた。

設計を生かす大工の技

2019年度第12回あおもり産木造住宅コンテスト
優秀賞受賞

寶田 様邸

ユーザー訪問

DATA

田子町　2019年5月竣工

- 延べ床面積／70.00坪（231.40㎡）
- 使用青森県産材／スギ（外壁、床、柱、天井、階段）、カラマツ（梁）など。

スギを縦張りにした板壁と、ガルバリウム鋼板を組み合わせた外観。間口が広く、建物から離れないと全体を見渡せない。延べ70坪。さすがに大きい。右側に2台分の駐車場、左側が板張りの壁面、その中央に玄関がある。面積が大きい板壁に柿渋色の塗装をして色彩を抑え、2階と1階の屋根の破風に張ったガルバリウムの横に走る二重の黒い線が〝額縁〟となって全体を引き締めている。「木」と「鋼板」が融合したハイセンスな設計だ。

「われわれは図面を基に家は建てられるけど、お客様の要望を図面という形にできるのは建築家ですからね。建築家と工務店の〝合作〟ですよ」――。大坊社長の後から玄関の中へ入る。寶田様が迎えてくれた。薪ストーブが置かれた部屋ほどの広さもある玄関土間。そこから

「木」と「鋼板」が融合したハイセンスな設計の外観

一望に見渡せる大空間にまず驚いた。写真で見るのとは迫力が違う。ワンルームのキッチン、ダイニング、リビング合せて36帖。平屋が建つほどのスペースだ。

勾配天井に現わしにした太い登り梁はカラマツ。天井板はスギ。床もスギ。太い梁を受ける柱も太い6寸角のスギだ。内壁を漆喰塗りの真壁にして柱を見せ、36帖もの大空間に木肌の色合いを程よく融け込ませている。

車庫の上の中2階に主寝室。リビングの脇に現代和風の客室。ひととおり室内を拝見してから、リビングのソファに座った。東京の建築家(瀬野和広氏)に設計を頼んだというそのいきさつから話を伺うのが順序だが、ソファの隣でデンと存在感を示しているダイニングテーブルについ目がいく。

風除室へ続く、色彩を抑えた柿渋色の塗装が施された板壁のアプローチ

——ずいぶん立派なテーブルですね。

寶田様の話　テーブルというより、作業台なんですよ。蕎麦を打つ大きな作業台ありますでしょ、ああいうイメージ。大坊さん(大坊幸吉社長)に頼んで作ってもらったんです。大工さんが何日も、何十日かな、1人で黙々と作っていましたよ。

——サイズはどれくらいありますか。

大坊社長の話　(スケールをあてがい)2m×1m40㎝です。

薪ストーブが置かれた広々とした玄関土間。これだけで一部屋分ありそうな広さだ

寶田様の話　天板は1枚の板に見えるけど、これ、柱を1本1本貼り合わせてあるんですよ。

大坊社長の話　4寸の角材を12本使って1枚の天板に仕上げました。

寶田様の話　厚さが12㎝で、しかも無垢材の天板のテーブルなんて売っていませんでしょ。手作りのイッピンです。どっしりとした重さも、指の背で叩いてみた音も本物の木ですしね。存在感がありますよ。蛇口とシンクが付いているからお友だちを呼んだときにここで料理もつくれるし、すっごく気に入っているんです。シンボルですよ、わが家の。

住宅を〝プロデュース〟要望にセンスで応える

——さっき、寶田様のお宅に入るときに、大坊社長はインターホンを鳴らしませんでしたね。以前からのお知り合いなのかなと思ったんですが。

大坊社長の話　（笑顔になって）当社の展示場を購入していただいたお客様なんですよ。

——ということは、その展示場を自宅にしている、ということですか。

寶田様の話　そうです。

——なのに、また自宅を建てた？

寶田様の話　（頷きながら）最初は貸家を建てる計画だったんです。今、話に出ましたように自宅は4年前に（展示場を）取得していましたから、次は将来のことも考えて貸家にしようかと。それで大坊さんに相談してみたんです。実は大坊社長とは、展示場のときからじゃな

キッチン、ダイニング、リビングがひと続きになった36帖もある圧巻の大空間

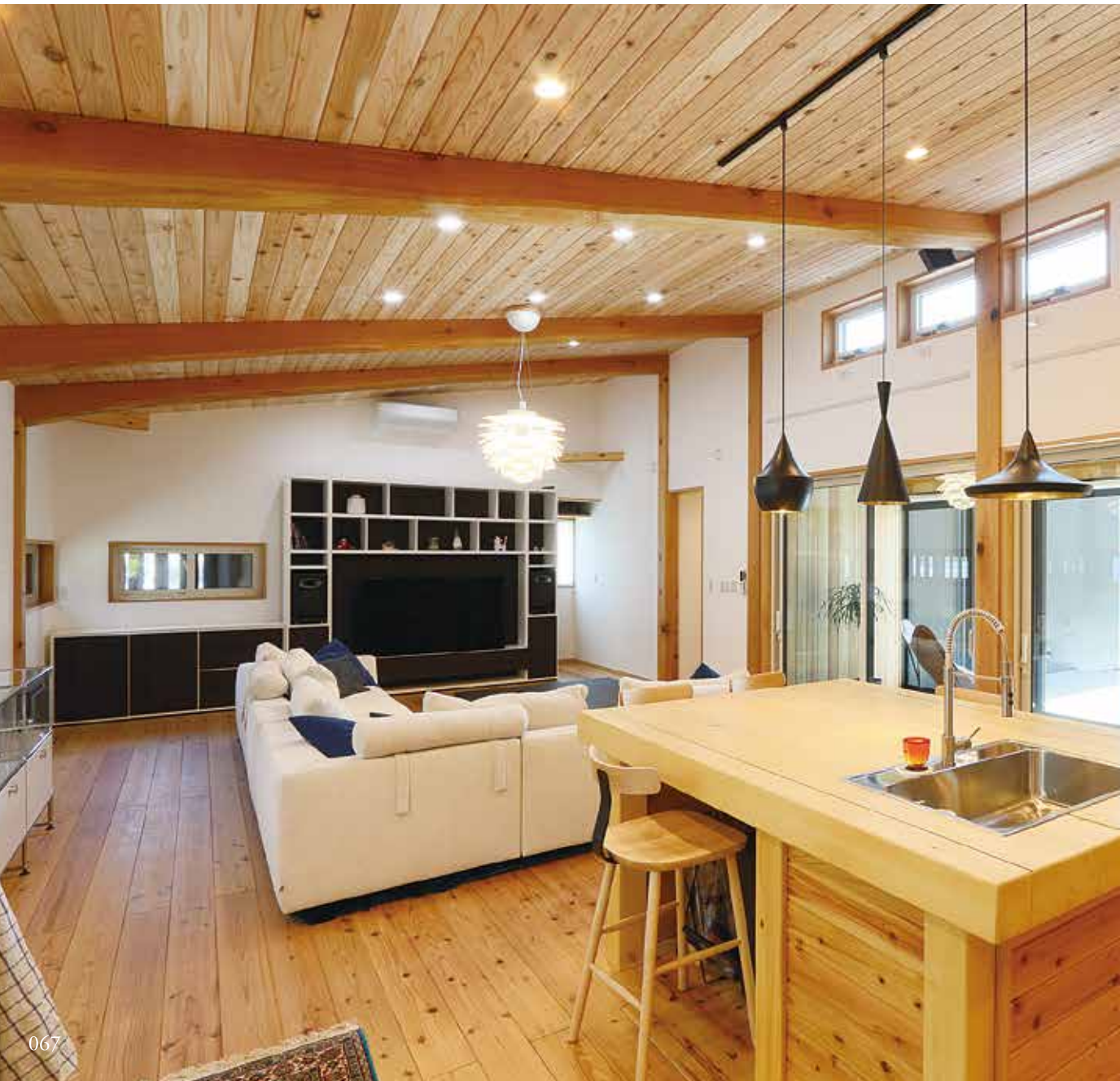
く、もっとずっと以前からの知り合いなんです。それと、展示場を購入した後に、わたしの実家も大坊建設で建てましたし、家族ぐるみの付き合いなんですよ。展示場の住み心地に満足していなければそういう流れにはなりませんよね。それで「家」のこととなればなんでも大坊さんなんです。

――貸家の計画を大坊社長に話されたのはいつのことですか。

寶田様の話　2年前でした。そしたら大坊さんが車で盛岡に連れて行ってくれたんです。

大坊社長の話　当社が取扱い工務店として加盟している大手の住宅設備機器メーカーが全国で「企画住宅」を展開していまして、そのモデルルームが盛岡にあるんです。それを見てもらおうと思いまして。

寶田様の話　自宅を建てるなら今住んでいる家（元展示場）のリビングみたいな伸び伸びとした大空間が第一条件ですけ



4寸の角材を12本使って1枚の天板に仕上げたというダイニングテーブル。寳田様邸の“シンボル”だ

ど、貸家なら、まず外観です。借りる人がひと目見て、「素敵！」となるような外観。関心を惹くデザインでないと、話は進みませんからね。見学したモデルルームは、さすがに大手が手がけただけあって外観も内観も洗練されていましたよ。

ところが、見学した後に、変化が起きたんです。わたしに、です。貸家の計画だったのに、自宅が欲しくなってきちゃったんですよ。モデルルームに感化されたんでしょうね。いっそ新しい自宅を建てちゃおうかなって。そうしたら大坊さんが、自宅なら企画住宅じゃなく自由設計で行きましょうよ、となったんです。紹介してくれたのが「ビーダック」でした。建築家を紹介するサービスを行っているんだそうです。気が合わなかったら断ってもいい、と大坊さんが背中を押してくれたので、ともかく話を進めてみることにしました。

——ビーダック？

大坊社長の話　これです（大坊社長がスマホで検索して画面を見せてくれた——Builder〈建築者〉 Design、architects〈設計者〉 And Clients〈依頼者〉の頭文字を取ってBDAC）。

和風、洋風と得意分野がそれぞれ違う18人の建築家の中から、お客様の要望に合わせて紹介するシステムになっているんです。要は、家づくりをプロデュースするのです。

「黒色」には木肌が似合う柱はスギ、梁はカラマツ

——昨年むつ市に大坊建設で自宅を建てたお客様も設計は仙台の建築家でしたね。

大坊社長の話　最近はそういうお客様が増えてきているんです。今はネット社会ですから、全国のいろんな住宅をパソコンでいくらでも見られます。いろいろ見ているうちに、目が肥えてくるんですね。デザインの斬

「木」の感じがくどくなりすぎないように内壁は白壁にしてバランスを取っている

新さでは東京の建築家がそれこそ一枚も二枚も上手で、激戦区で仕事をしているだけに磨きがかかっています。キラリと光るものがないと、パソコンで見ているお客様の目をスルーしてしまうんですよ。お互いに見えないところで磨きをかけ合っているということですね。

寶田様の話　大坊社長から「要望」のチェックシートを渡されました。予算から始まって、家族構成、坪数、外観は和風が好きか洋風かなど設計に必要な項目が並んでいました。次には、推薦された建築家と会うのだそうです。どんどん進められていってしまうような不安がないわけではなかったんですけど、大坊さんなら悪いようにはしません。お任せすることにしました。

——建築家とはどこでお会いしたのですか。

寶田様の話　田子町まで来てくれたんです。大坊さんの事務所でお会いしました。気さくな方でしたよ。建てる土地も見てもらい、明朝新幹線で帰るというので八戸のお店で一席設けました。そのときに改めて間取りの要望を聞かれ、住んでいる家のキッチン、リビング、ダイニングが一つの広い空間になってい

大開口のガラス戸から陽光が射し込む物干しのサンルーム

サンルームの外に設置された広々としたデッキテラス

車庫の上の中2階に設けた寝室に通じる階段。その天井の一部にもさりげなく木が張られている

寶田様の話　好きな「色」を聞かれたんです、建築家に。何色が好きですか、と。「黒」と答えました。それが外壁の黒のガルバリウムに反映されたんですね。全部がガルバリウムだと家が真っ黒になってしまうので、バランスよく「木」を使ってくれたんです。

——リビングと主寝室をドアで仕切るのではなく、車庫の上の中2階に設けて、階段で繋がりを持たせながらプライて、わたし、お友だち呼んでわいわいやるのが好きだから〝広さ〟だけは外せない、と伝えました。最初の図面が上がってきたのが2年前の夏です。何回か変更のやり取りはありましたけど、その冬にはもう決まっていました。

「建てるのは大坊さん」ぶれない信頼が安心感

——外壁に「木」を張ったのも寶田様の要望ですか。

友人も絶賛の黒を基調としたモダンな和室

ベートを保っている。そこに設計のセンスを感じましたが。

寶田様の話　そういうところがうまいんですよね。仕切るのではなく、上下に空間をずらすというところ。ドアを閉めてしまうとリビングも寝室もそれぞれ空間が狭められてしまいますけど、ドアではなく、階段であれば繋がりがありますからね。

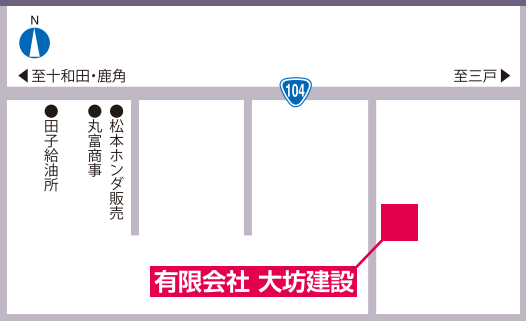
――客室もそうですね。

寶田様の話　そうそう、ドアを付けるのではなく、ちょっとした渡り廊下みたいな雰囲気を演出して、その奥に和室の戸を建てている。開ければわたし好みの黒っぽい壁で、友だちも、「素敵」って言ってくれます。そこから眺める坪庭もまたいいんですよ。建物が大きい分、完成するまでそれなりに時間はかかりましたけど、満足のいく形にしてくれました。

――建築家との良い出会いがあったのですね。

寶田様の話　というよりも、設計が誰であっても、建てるのは大坊さんと決めていましたからね。そこはぶれません。その安心感が大きかったですね。全部任せられましたから。

窓に取り付けた、カーテン代わりにスライドさせて開閉できる木製建具

有限会社 大坊建設

本　　社●三戸郡田子町大字田子字下田子69-4
TEL.0179-32-3580 FAX.0179-32-3582
http://www.ii-ie.net/daibou/
E-mail : kouki299@leaf.ocn.ne.jp
八戸営業所●-八戸市下長5丁目9-9
TEL.0178-28-2798 FAX.0178-21-3558